

平成22年10月例会 記念講演

「ヒトを人として育てる 子育て・教育・社会を」

国立大学法人 和歌山大学

学長 山本 健 慈 氏



皆さん、こんにちは。

ご紹介いただきました山本でございます。樫畑代表幹事より紀州藩をめぐる「いろは丸事件」のドラマのご紹介がございましたが、私は長州（山口県）の生まれでございます。私は長州に生まれたのですが、元々実家は親の代々滋賀県でございます。学長に就任いたしますときに文部科学省から新聞発表内容の照会があり、滋賀県出身と書いてありましたが、山口県出身と書き直してもらいました。それは小さい頃は吉田松陰などについて、たくさん教えられた記憶があり、そのことが今日の私の考え方なり態度なりに大きな影響を与えていると考えているからでございます。そして縁が

あって和歌山県に来ているわけでございます。

さきほど樫畑代表幹事のご挨拶のなかにも、和歌山はいろいろな指標で苦戦しているということでありました。確かにそうなのでありますが、今日のテーマ「ヒトを育てる」環境の基盤において、私はこの日本の中で和歌山は非常に大きな意味があると思っております。そのことを是非皆さんにお伝えし、私たちと共に是非、次世代を育てる事業をご一緒にといい思いで、お話をさせていただきたいと思っております。

今日は4つ程お話をしたいと思っております。
まずは和歌山大学の学長として、「最近の和歌

山大学の事情」について、少しご説明申し上げたいと思っております。

それから、和歌山大学の学生たちや教育の事を頭におきながら「ヒトを人間として育てる」という意味や、その意味で「大学が果たす役割」、最後には皆さんと共に「ヒトが人間となる社会へ」という事で締めたいと思っております。

「ヒト」をわざわざカタカナで書いているのは、動物としての「ヒト」ということについて深く注目する必要があるのではないかと思っているからであります。

人間はそもそも「ヒト」という動物・哺乳類であります。その「ヒト」というものの動物性をわれわれはもっと着目する必要があります。それも「ヒト」という動物は厄介な動物であります。

今日は、ほとんど男性の方でございますが、後程、幼児の映像をお見せしますが、自分のお孫さんのことを重ねていただいてもよろしいですし、「ヒト」という動物の本性みたいなものを是非ご理解いただきたいと思ってお見せしたいと思っております。

私は、先程申しましたように山口県で生まれました。高校時代を滋賀県で過ごし京都で学生時代

を終えまして、1977年に和歌山大学に参りましたので、もう34年間、和歌山で仕事をさせて頂いているということでございます。

今日のお話の中で紹介しますが、実は私は1988年まで和歌山市内に住んでおりましたが、共働きをするということになり、共働きをする生活条件が当時、和歌山市内にはまったくなかったのでやむなく大阪に移りました。

当時、仮谷さんが知事として、数人で仮谷さんの前でお話しする機会があり、「和歌山県に住んでいると全然共働きで暮らせないので、大阪に移ることにしました」と言いますと知事は苦笑しておられました。当然ですが、どこに住むかという選択については、子育て、教育などは極めて大きな要因となるわけです。そんな事情で大阪の熊取町というところに引っ越しまして、今もそこを中心に暮らしています。移り住みました熊取町で、無認可つまり住民の人たちが共同事業として行っているアトム共同保育所というところに、たまたま子どもをいれました。その縁でこの無認可保育所の運営に携わり、今では社会福祉法人アトム共同保育園の運営に携わっております。

私の場合、世間ではきっと和歌山大学の教員としては並みの教員にしかすぎませんが、保育所の



運営に責任を持って携わっている教員というか研究者としては、非常に珍しいと思います。その関係で厚生労働省とか文部科学省の仕事をする機会があるのですが、それは研究者としてではなくて、この貧しい保育所を非常にユニークで現代的意味のある保育所に仕立て上げた一員であるということに注目していただいていると思います。

保育といった場合、一般に子どもが焦点になるわけですが、私の場合、あるいはアトム共同保育園の場合、子どもだけの保育所ではなく、親やそこで働く保育士の人生も支援するということが非常に大きなテーマになっております。

或いは、これもまた後で触れますが、人間に関わる様々な問題は特にニュータウンというものが形成されて以降生じている、とくにこの間日本の家族・地域をめぐる状況は壮絶な変化を遂げている、というのが社会科学の観察でありまして、そのニュータウンで如何にまちづくりを行うかということについての基本的な方向がまだ日本社会では定まっていないと理解しております。熊取町のニュータウンはいくつかございますが、私どもは保育園の経験から「ニュータウンまちづくり支援型保育園」を提案いたしまして、2003年には無認可共同保育所を社会福祉法人立保育園として開園し、2012年には熊取町最後のニュータウンでも新しい保育園を開園することになっております。もしご興味のある方はホームページ等をご覧くださいければと思っております。

(<http://www.rinku.zaq.ne.jp/atom/>)

そこでいろいろ私が考えました知見も交えて、今日はお話をしたいと思っております。

さて和歌山大学の最近の話題といいますと、「はやぶさ」が帰還した時の映像を撮影したことであり、世界中に知られることとなりました。多くのメディアで「来た、来た、来たあ」と言っていて尾久土教授が叫んでいる映像がよく紹介されています。それを唯一、撮影したのが和歌山大学であります。この当時、NHKもこのチームのすぐそばにいたということですが、NHKはワールドカッ

プの映像に集中しており、スタッフ整備を全然現地でやっていなかったのと和歌山大学だけが撮ることができたということがございます。当日の生中継には、約63万人のアクセスがあり、夜の録画中継には約54万人のアクセスがあったということで、ひとつのインターネットの記録だと聞いております。このチームは、和歌山大学宇宙教育研究所に属しております。宇宙教育研究所が和歌山大学にあるというのも皆さんにとっては奇妙な事といえますか、不思議な事と思われるのではないかと思います。この謎解きも、後にさせていただきながら和歌山大学の発展の鍵を私はどう考えているかということをお話ししたいと思っています。



経済学部(旧高商)正門



学芸学部(旧師範)正門

さて、和歌山大学の歴史はご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、学芸学部（現在の教育学部）と経済学部の2学部構成で、1949年に発足いたしました。1949年新制大学ができた時に、いろいろな地域の国立大学とともにできたわけであり、後からテーマにしようと思っておりますが、

なぜか和歌山大学の前身の戦前から、農や林にかかわる高等教育機関を和歌山県は持ち得ず、そのマイナスが今日も引き継がれているというふうに思います。これはもちろん日本の高等教育政策のなかで生じたことで、和歌山だけの責任ではないのですが、今日考えますと農や林にかかわる研究組織が和歌山大学にないのは残念だなあというふうに思っております。

しかし、師範そして教育学部は教員養成として伝統ある学部でございますし、和歌山高商は1922年にできて、高商のなかでも非常にユニークで、たいへん素晴らしい業績を上げているというふうに言われております。この和歌山高商の設立者・初代校長は岡本一郎さんという方ですが、この岡本一郎さんは私と生まれた所（山口県玖珂町、現在の岩国市）が一緒でございます。私が和歌山大学に就職した時に、その生まれた所に行きましたら和歌山大学(の経済学部)をつくった最初の方は岡本一郎さんであるというふうに聞いたことがあります。岡本一郎さんは後に山口高商の校長に移られるのですけれども、学生からはたいへん慕われた方であったようで、卒業生たちは著名な彫刻家、保田龍門さん（元和歌山大学教育学部教授）にお願いして、胸像を作り構内に設置しております。この胸像は、現在も西高松（現在は和歌山大学松下会館）の庭に設置されております。その意味で経済学部の卒業生の方が今日も誇り高く、いろいろところで仕事をしておられますが、その伝統はその時代、非常にリベラルな、つまり単なるお金儲けとか商業の実務だけではなく深い教養を持った人材を育てるところにあったというふうに思われます。

こうして2学部体制で約50年近くを過ごして参りましたが、地元の皆様方の大きなご支援のもと、1995年に第3の学部、システム工学部を開設いたしました。国立大学最後の学部であります。

また、2004年には国立大学の運営が法人化されましたが、法人化後初めての学部設置が実は和歌山大学観光学部であります（2008年）。日本の大

学史上、国立大学としての最後と法人化後最初の学部設置というエピソードを和歌山大学はもつことになりました。

さて、和歌山大学が法人化されまして一つの独立した経営体として事業を行わなくてはならないということとなり、6年間の中期目標・中期計画を設定して運営しております。本年（2010年）の4月からは第2期6年間が始まっております。

以下、第2期の中期目標・計画の概要をご説明します。

和歌山大学は「地域を支え、地域に支えられる大学」でありたいと思っております。それは和歌山という地域が持続可能な社会であることを支える大学でありたいということでもあります。目標は3つ掲げておりまして、一つ目は学生をどのように育てるかということでございます。「青年期に至る人間形成上の諸課題を深く認識する」、その上で教育にあたるということを重視しております。大学に入る前の生活や学びに大きな問題があると思っております。恐らく皆様の企業の中で若者を雇っておられ、また、中年層の様々な様相があるかと思いますが、この青年期に至る人間形成上の諸課題という問題は単なる実務だけではなく、この社会をどう動かしていくかという点で非常に大きなキーワードだと思っております。

それから二つ目は研究をどのように進め、どのように貢献するかということでもあります。和歌山から日本と世界の発展に寄与するという志であります。

三つ目には大学内部の経営手法であります。教員の多様な問題関心を尊重する、職員の主体的な働きを激励するということを重視し、教員・職員・学生3者の相互の信頼関係で大学を創るということを目指しております。

実は、国立大学法人第1期の6年間（2004年度～2009年度）というのは、初めて設計された制度での経営であり、たいへんな苦勞がありました。和歌山大学だけではなく、各大学が、かなり前のめりで経営しておりまして、様々な矛盾や問題点

が生じました。その反省をふまえて、今ご紹介しました第2期の戦略文書はつくられているというところでございます。

先程の三点で申し上げましたことをもう少し詳しく申しますと「子ども、学生の生涯の人生を支援する大学」にしましょうということです。今年の入学案内のキャッチコピーは「生涯あなたの人生を応援します」です。この〈生涯〉という言葉にふたつの意味を込めております。

入学までの18年間の人生というのは一つの側面であります。つまり入学までの彼らの人生をどのように考えるかということに思いを致さないと大学の教育はできないということでもあります。この問題は、日本の大学の頂点として位置づけられる東京大学を含め全て同じような困難を抱えております。このような状況を考えると本当に一人一人の青年の人生の幸せのためにどう支援するかというのは切実な課題でございます。つまり入学までの18年間というものをいかに過ごしてきて大学に入ったか、これまでの人生（生涯）をふまえて支援することが必要であります。

もうひとつの〈生涯〉は、卒業後の人生の側面であります。卒業後は皆様方の企業等をお願いするわけですが、皆様ご存知のように3年間で30%離職するというようなことが言われております。卒業後、挫折したり転換をしたいという学生が随分大学にリターンしてきます。これも受け止めて、支援するシステムが必要であり、それがないと大学は社会にも貢献できないというふうに思っております。

〈大学と地域〉の関係について少しご説明いたします。和歌山大学は和歌山の地域の皆様方と〈地域の課題を共有し、ともに苦悩しその解決過程に参加する〉ことが必要であると思っております。地域には、様々な課題がございますが、本当に地域の方々が悪影響を及ぼされる思いを共有しないと、われわれはお役に立てないのではないか、まずわれわれが出来合いの知識、出来合いの研究成果で皆様方とおつきあひしても、到底皆様方の苦悩に

は答えられない、切実で深刻な問題が地域にあると思っております。

ですから何ができるかよりも、まず和歌山の地域の苦悩を共有できる教員・職員を増やしたいと考えております。

以上が和歌山大学の現状の概略であります。

さて、「ヒトを人間として育てる」という本題に入ります。

ヒトという、ヒト中心にみますと高等な動物だといいますが、なかなか厄介なものでございます。例えば、子どもが親を殺したり、親が子どもを殺したり、死んでしまったが親を放置するということが起こっております。このような現象はほかの動物の世界ではない事であります。人間、ないし非常に高等なサルの一部だけが同じ種のなかで殺し合いをするのであります。

私は「ヒトを人間として育てる」ためのキーワードとして「群れ」と「トラブル」という二つを重視いたします。最近の若者は人間関係に大変弱いということが言われております。現在の人間の育ちは「複雑な群れ」の生活を経験していない。つまりヒトという個性的で厄介な関係が常に展開する「群れ」というものが、日常的に存在しない中で育っている、人間が形成されているというふうに思います。

従って、最近の若者が、ひ弱なのは当たり前であります。そもそも生活の中にトラブルというものが持ち込まれない、存在しないそういう日々の蓄積で生きているわけですから、これはひ弱になるのは当たり前だと思っております。彼らの責任であるかのごとき言説、あるいは彼らを育てる家庭、父母の責任かのごとき言説は、歴史をみない極めて認識の浅い、あるいは先行世代の責任の無自覚であるといえましょう。

トラブルが起こった時に、それが好奇心の対象になり解決することによって自分の喜びが感じられるという局面は今の子どもたち、或いはこの数十年間の子供たちには経験できない世界として常に存在しているということでございます。

なぜ人間関係に弱いのかということ群れないからであり、なぜトラブルに弱いのかということ日々の生活においてトラブルを経験していないからというふうにいえるのではないかと考えます。そうすると何が重要かということ、われわれは彼らの育ちに「群れ」と「トラブル」を準備するということが必要なのではないかとこととあります。

人間は動物としての「ヒト」と生まれると、長い歴史をもった単に親の影響を受けたというだけでなく、もともとその個人あるいは人間の遺伝子をもった個性的な動物としてまず生まれるということが一つであります。

この幼い人は何によって自らの存在を自覚するかということ、同世代の人と交わるなか（すなわち群れのなか）で自分とは違う欲望、自分とは違う物の感じ方をする「他者」という存在を知るわけです。なぜ同世代の人が必要かということ、幼い人にとっては大人というのは非常に操作しやすいとか自分のことを考えてくれる存在でありまして、対等なぶつかりあいといいますか衝突が起きないわけです。幼い人というのは単純にいえば赤ちゃんを並べておくと本当に欲望の強い子、或いは欲望の非常に薄い子がおりまして、そこでのいろいろなぶつかり合いがあり、自分とは違う存在・動物がいるということが自覚できるわけです。

他者という存在に気付くことで、初めて自分という存在も意識できます。そして自分という存在を伝えるコミュニケーションの方法というものが必然的に必要だということが自覚されてまいります。

つまり都合のいい大人ばかりに取り囲まれていると、かわいい子どもだと思い大人は寄ってたかって育てるのですが、これでは子どもはコミュニケーションする必要が全くないわけです。欲しいとか欲しくないとか、単純なコミュニケーションで全て終わってしまいますので、その点でコミュニケーションに必要な脳の発達に問題が生じるのは明白であります。

その意味では「ヒトが人間になる」というプロセスは本当に長い歴史、同じような状況、環境を保持してきたわけですが、この100年ぐらいは急速に変わってきております。そのために人間に非常に大きな変化が起こっているというふうにも考えてもいいのだと思います。

さて、そういう一般的なお話をもとにして和歌山大学から見える風景は、どんな風景であるかということのを少し申し上げたいと思います。

大学への入学というのは入学試験に合格するということが全てでありまして、それ以外の問題は全く問うておりません。

つまり、入学試験に合格したから和歌山大学生になることができた、或いは大学としては入学を許可したわけです。ところが入ってみますと大学の教育システムは学生の自主性を前提にしたシステムとなっております。彼らの18歳までの教育システムからみれば、大変不親切なものとなっております。従って残念ながらそこから脱落するというか、ドロップアウトする学生たちが今日随分出ているということに気付きはじめたわけでございます。

私が学長になりまして、驚いたのは学生の退学、休学申請の届けの数と内容でございます。それを見て一人一人の扱いを丁寧にしよということに致しまして、なぜ休学するのか、なぜ退学するのかとかいう申請をその担当の教員、職員に聞き取ってもらい、私にも詳しい中身がわかるようにしてもらいました。

長い間の蓄積の結果として学生たちが判断し退学、休学申請を出しておりますので、それを翻意させるということにならないのは当然であります。しかし彼らが発しております情報は、大学のシステムだけの問題ではなくて、今日の若者の幼少期からの育ち、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校、さらには予備校や塾の関係者も考えるべきことが含まれております。従ってこれらの情報を、高校の先生方、それ以前の教育機関の方々、塾や予備校や親御さんとも共有し、どういう形の人生

の育ちがいいのかということをも是非研究したいというふうに思っております。

例えば、私が大変印象深いのが、北海道から来た学生が、もう勉強する気力がない、疲れきった、だから退学させて欲しいというふうに書いてございました。或いは、九州の島から来た学生が、もう勉強に疲れた、勉強する気力がない、だから退学するというふうに書いてありました。このように既に入學するまでにエネルギーを失ってしまった学生も随分いるわけでありまして。或いは他人と話ができない、わからないことを他人に聞くことができないとか、そんなこともあるわけがございます。自己紹介ができない学生がいるというわけで、経済学部では入學直後の小集団のクラスの講義を解説し、そこでは自己紹介のためのシートをつくり、自己紹介はこういうふうにしましょう、或いはこういうことをみんなで聞いてみましょうという事をやっております。もちろん名前は言えますし出身校とかは言えます。しかし自分のことを深く考えたことがないので自分はどんな人間でどんな思いをもっているとか、自分というものの人物の実像を語る自己紹介ができないということなのです。

このような学生生活のなかの問題は、もちろん、これは親御さんたちも気づきます。例えば大学に行き渋っている、毎日大学に行くはずなのに行かない、行かないのはどうしてだろうかと聞くと友達がいなかったりとか、いろいろな事を言うのです。そうすると親御さんの方から大学に、友だちをつくってもらえないかというような依頼があったり、一人暮らしができないので結局親御さんが一緒に暮らしているということもあるわけでありまして。

これらは、彼が悪い、親が悪いということではすみませんで、結局彼らが自立するべくいろいろなプログラムの働きかけを行っていく必要があるということでもあります。

こうした現象を考えますと、彼らの18歳までの人生のなかで彼を取り巻く大人たちは、彼の成績が大学に入る水準に達しているということについ

ては、おそらく着目していたと思いますが、しかし彼がどれだけ人間として成熟しているかという点についての関心は、恐らくあまりなく、危惧することなく放置されていたということではないかと思っております。

そういうことを考えますと、ヒトが人間として発達し形成されていくうえには次のようなことが重要ではないかということなのです。

それは、先程申しました「群れ」です。大人に管理されない時間・空間・人間関係があることが重要だということでもあります。しかし現在の子どもは生まれた瞬間から、大人にほとんど管理されております。親は本当に注意深く見守っております。多くの虐待も見守疲れ、見守ることに疲れて反作用として虐待してしまうというふうには理解してもいいかと思っております。

保育所・幼稚園に行きますと、これらは全く管理空間にあります。かつて皆様方が幼少期に経験されたであろう、野山、田畑で子どもだけで自由に遊び、暴れ、けんかもするというような経験はまったく不可能であります。管理されておりますので、人間関係上のトラブルは、もちろん無いということでもあります。そうすると、自分を知り、他者を知り、他者とコミュニケーションをとる能力は、ほとんど発達不全に陥るというふうには考えてよいかと思っております。いろいろなトラブルのときに自分を知るということが一番重要なことですが、自分は何が悲しくて、何が楽しくて、何が嬉しくて、何が苦しいかということの自分自身の理解が非常に欠落してくる、つまり自分の感情の動きとか自分の人間的本性についての表現をしないものですから、その経験、そのなかでの自分自身の理解が非常に乏しい。例えば、同じ状況のもとにあっても楽しいという子どももいれば、苦しいという人間もいるわけです。これほどまで人間というのは対極的であるわけですが、そういう自分自身のことが自覚できないとすると「ヒトから人間へ」というプロセスをつくる必要があるのではないかということでもあります。

関連して熊取町で行った調査をご紹介します。小学校に入る前の段階の親御さんに、〈子どもの育ちで何が一番大切だと思うか〉と質問しましたところ、「人と関わる力」が圧倒的であります。大阪は、橋下知事のもとで学力、学力と大変な圧力の中にありますが、熊取町のお母さんたちは、しっかりとわが子をみていると思います。〈学力が一番大切〉という人は、11%。何が一番心配かという幼児と一緒に「人と関わる力」これが圧倒的であります。親たちが自らの子供の未来について何を不安に思っているかという、ここに全くよく表現されていると思います。それはなぜか、親世代が育った時代というのは皆様方の従業員の方々、社員の方々の世代でもあるわけです。彼らの育つプロセスは非常に人間関係が複雑で例えば、いじめの風景は日常的な風景でありましたので、いじめられた側にも後遺症はありますが、いじめた側にも傍観者にも非常に人間に対するおびえの感情というのを残しております。ですからあまり人と深く付き合いたくない、深く付き合うと傷つくこともあるし、傷つけることもあるというおびえは相当深刻であります。

企業内部の人付き合いは、まだ役割がはっきりしておれば深い付き合いはいらぬわけです。ところが、若いお母さんたちで集まるとマニュアルがない世界ですから生の自分で対峙しないとつきあえません。

結局、マニュアルがありませんので自分で考えないといけない。そうすると非常におびえ、警戒とおびえが支配するということになります。

ではヒトの群れのなかでの育ちの風景を映像でみていただきましょう。冒頭紹介しました私が関係しておりますアトム共同保育所（現在はアトム共同保育園）の、2003年NHKスペシャルで放送されましたものの一部をご覧いただきたいと思います。ここに3つエピソードがございます。①やんちゃな子とおとなしい子とのトラブル②やんちゃな子同士のトラブル③なぜか仲間はずれにされる女の子のトラブルとこの3つの部分的なシーンでお見

せたいと思います。

（映像が流れる）

このように子どもが群れをなして、自由に空間があると、けんかがあったり、仲間はずれがあったり、このようなことが起こるわけです。これは恐らく皆様方の世代からすれば、親や先生が管理している中で遊んでいたわけではありませんので、日常的な風景であったのです。だけど日常的風景を経験した世代のおじいちゃん、おばあちゃんも、いまの映像のような風景にはなかなか耐えられないというのが現状ではないかと思えます。ヒトという幼い動物は先程言いましたように、欲望の塊で自己中心性、自分の欲望実現をするということできているので、そのぶつかり合いがけんかになるわけで動物としては普通のことなのです。しかし、そこで初めて自分とは違う欲望をもち自分とは違う理屈をもっている他者が存在するということが本当に身にしみてわかるということです。対立の他者と出会うことによって、自分とは違う欲望や心の動きをする存在があるということが実はわかるわけです。これは皆さんも大人でありますのでおわかりかと思うのですが、この時代の子供というのは理屈でわかるわけではないのです。こういう体験を経て初めてわかるわけです。理屈ではなくて体験を経てわかるということが本当にわかるということでもあるわけでありませぬ。

そうすると安心して喧嘩をできる仲間とかその喧嘩を見守ってくれる大人というものがなくてこれは成り立たないわけです。アトム共同保育園の園長等は、全国の保育士、幼稚園教員、保育園や幼稚園の経営者の研修に呼ばれておりますが、この映像を見ると若い保育者さんたちが泣くのです。なぜ泣くのか、それは、自分はこういうことは必要だと思うけど自分の保育園・幼稚園ではできない。きっと園長さんにしかられる、或いは親からクレームがくるのでできないというのです。人間が成長するためにこういう経験を自分たちがさせてあげたいのにできないといって泣くわけです。

それは、結局子どもの群れでのトラブルを見守ることの意味を理解できない大人たちが子どもを取り巻いているというふうにいえるわけであると思います。

先日も文部科学省に行った時にレクチャーしてきましたが、保育園は共働きの親のためにあり、幼稚園は学校に入るための準備のためにあるというのが一応制度の性格付けでありますけれども、私はそんな意味を超えて「ヒトが人間になる」ための最低条件として「群れ」としての存在というところに最大の意味を見出しております。つまり親のもとにある数年間は、まったく「群れ」は経験していないし、自分にとって都合のいい大人だけが相手をするという生活であります。これは人間として育たないのは当たり前であります。ですから「群れ」のなかに身をおかせるということがヒトとして育てるためには最低の条件であると思っております。幼稚園・保育園どちらでもいいし、別の組織でもいいのですが、ヒトが人間になる最初の段階でこういう「群れ」が必要だと思っております。かつては、家にも地域にも兄弟姉妹が多かったので人の群れがあり大人の人の群れもありました。ところが今、子どもが少なくなっているため家族の中では子どもが一人か二人、そして核家族化しておりますので、もちろん家族の中の大人も少ない。ニュータウンという住宅環境にあっては隣近所に対する警戒感がありますから、お互い自由な行き来はないとなると、本当にあらゆる意味において、ヒトが生後、重要な時期に人の群れを経験せず、或いは人同士のトラブルを経験しない、つまり人間となるべき最低の条件を全く持たないまま、大人になって成長しているということがおわかりになるかと思います。

繰り返しになりますが、幼い人のトラブルの意味はこういうふうと考えられるでしょう。問題はヒトを育てる大人になれるかということであり、幼い人つまり子どもは自己中心・個性的な存在であるので群れのなかではトラブルがおこります。従って子どもにとっていつも快適な空間・時

間に存在するというふうにはいかないわけです。トラブルで不快な経験をした子どもは家に帰って何々ちゃんにいじめられたと、きっと親にも言うのでしょうか。子どもは辛さを訴えるでしょう。ここが重要であります。その時、親が過度にかわいそうだと感じ、保育園や幼稚園に苦情を言う。その苦情が過激になるとモンスターペアレントなどという言葉が出てきます（私はこの言葉を使いませんが）。非常に攻撃的になる場合があります。苦情を言われると経営者或いは保育士はそれに応えて、トラブルが起こらないように子どもを管理する。これが今一般的であります。そうすると群れでの人間化のプロセスは全く無くなるということであり、その人間化のプロセスを奪われたまま例えば学力だけを集中して育てようと思うと、人間の本質的な部分が欠落したまま、単なる知識の量、或いは情報の操作だけを覚えていくということに、今なっているのではないかと思います。

そこで「親を大人にする」ということが重要であります。この辺は時間がないので省略させていただきますが、アトム共同保育園の経験で言えば本当に未成熟で本当に心配事や苦情ばかりを言っていた親が、5年間子どもに同伴しますと立派な大人になっていくということであり、

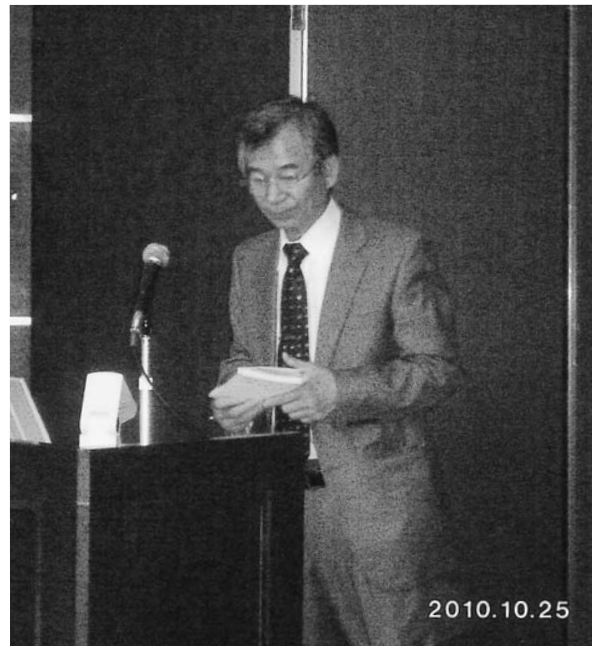
先日も文部科学省で、本当に幼くて未成熟で大人としては心配であった若い父親、母親が、この子どもとの生活、格闘、子供に同伴する中で立派な親になり大人になっていくプロセスは可能なのですということを繰り返し申し上げてまいりました。例えば先の映像で、出てきたお子さんは、非常にやんちゃで、すぐに手が出る。それを保育者が介入し、ある場面を設定致します。（詳しくは『裸で育て君らしく～大阪・アトム共同保育所』NHK出版をご覧ください）それは非常に衝撃的であったようで、お子さんは家に帰ってこう言いました。「僕生まれてこなければよかった」つまり5歳の子も自分の行っている事の意味がわかれば切実に自己反省というか、深く自分の存在に疑いを持つことができるのです。これは繰り返し叱

られ、いろいろなことをしていた結果、自分の事を考えることができる。そうするとお母さんはどう思うか「僕生まれてこなければよかった」と言われた時に何とひどい事を言わせるのだと言って、パニックになるお母さんも、もちろんいらっしゃると思いますが、このお子さんのお母さんはその子が育った保育園でのトラブルにも5年間付き添うという経験を積み重ねてまいりましたので、こう言っているのです。「わが子が深く悩むことが重要である。自分で意識しないとわが子は変わらない。でも一人で悩むのはしんどいだろう。だから親の役割はしんどいのを聞いてやって悩むことを励ましてやるのが親の役割である」と、わが子が「おれ生まれてこなければよかった」と語った時に、受け止めることができたのです。

このプロセスを簡単に申しましたが、ここではお母さんたちが、いつも自らの子どもたちのトラブルを語りあって他者のお母さんとも話しあって共に学び、共に解決するという訓練をしてきたということでもあります。ところが最近では苦情を言われ、その苦情に対して個別に管理し対応する。こういうことが起きると、一人一人の親は孤立させられ、そして孤立した中で不安というのが増大する。大人同士の学びあい（共同学習）を欠落させた対応はモンスターペアレントへの道ということになるのではないかと思います。

この3つのエピソードの結末は、いろいろな働きかけがあって彼が成長してきたという結末になっておりますが、本がでておりますので是非ご覧になっていただければ、どういうことであるかというのがお分かりいただけるとと思います。

私は、そういう子どもの育ちの状況をみながら「ニュータウンまちづくり型」の子育て支援、親の支援が必要だと考えるに至っております。この「ニュータウンまちづくり型」を少しラディカルに、わかりやすく表現すると、「家出のできるまちづくり」にする必要があると言っております。親と子のトラブル、子ども同士のトラブル、いろいろなトラブルが「ヒトが人間になる」プロセス



であり、親子の範囲だけで解決することに追い込まれない地域づくりをする必要があるわけがございます。特に思春期の親と子の関係は壮絶なことを伴うことがしばしばであります。それらを幼少の頃から良く知っている地域の親たちが支え合う、或いは企業でもそうかもしれませんが、企業のなかの家族同士が知り合ってお互いの苦労を分かち合い、或いは支え合うという、そういう関係を地域にも、或いは企業・組織のなかにもつくる必要があるのではないかとこのように思うわけでもあります。

さて、先程のような経験をしない学生たちが大学に入ってまいります。もちろん大学のなかで本当にのびのびと意欲的に学んでいる学生たちもおります。彼らにはしっかりと応援してあげる仕組みをつくっておりますが、様々な困難を抱えている学生たちもいます。私は、先程言いましたが、和歌山というところは若者が育つ可能性のある地域だというふうに深く確信しております。或いは、様々な経験ももっております。実は昨年8月に、学長の辞令をいただくために上京し、当時の事務次官の坂田さんとお話した時に「山本さんどういいう大学をつくれますか」と聞かれました。事

務次官というのはあまり現状をお知りにならない
と思ひ「大学というのは18歳まで惨憺たる人生を
送った学生を多く引き受けているので、一人前の
人間にしてとにか出ることがわれわれの責任だ
と思っています」こういうふうな言い方をしまし
た。そうしたら「18年間の人生で惨憺たるってど
ういうことですか」とおっしゃるので、今申しあ
げたような事例も言いました。和歌山は、なぜい
かということをお坂田次官に伝えました。「和歌
山は可能性があるので。和歌山は人が人に対す
る人間関係が非常に心厚くて、そういう青年たち
に対して思い深く、いろいろな事を支えている人
が具体的にいらっしやいます」と「そういう地域
や地域の人に支えられて和歌山の青年は育ちます
と、東京みたいなコンクリートの空白地帯のなか
には、そういうことを見出すのは難しいでしょう」
と言ったら笑っておられました。これは私の詭弁
ではなくて確信するところでありま。和歌山に
は、本当に日本の中でも最も深い困難を抱えるな
かにあっても、その困難から逃げずに、それと格
闘しておられる企業家もNPOの方もおられます
し、市民運動をしていらっしやる方もいるとい
うのが一番心強いことであると思っております。

今、私たちはインターンシップなどで皆様方の
会社、或いは地域でお世話になっております。和
歌山大学では、教育実習に地域ホームステイ教育
実習というプログラムを取り入れております。こ
れは南部町の山奥とか、かつらぎ町の山奥に2週
間ホームステイさせてもらいまして、そこのおじ
いちゃん、おばあちゃんと暮らしながら地元の学
校に通うということでありま。この実習に参加
した若者（多くは都会育ちの青年）は、地域の
方々の濃密な人間関係にふれ劇的に変化してい
ま。「日本語の通じる留学体験だった」と表現し
ているものもおります。

こういうことができるのも、和歌山という
フィールドがあり、温かく迎えてくださる地域の
方々がいるということでありまして、われわれは
地域の方々と共に次世代を担う若者を育てること

ができるというふうに思っております。

さて、最後に和歌山大学の形成は冒頭に申し
ましたが、こういうふうには新制大学、或いは国立
大学法人という歴史を経過してまいりました。し
かし最近痛切に残念に思ひますのは、和歌山大
学には、和歌山を支えている農や林を支える研究
の核がないということでありま。私は学長の任期
は、あと3年ということでございますけれども、
私の任期中だけで完結するとは思ひませんが、
和歌山大学のなかに、和歌山という地域の持
続的発展に寄与するという意味で、農や林を
テーマとする研究組織をつくる必要があるの
ではないかと思っております。

色々調べてみますと、和歌山大学にも農や
林を研究する研究者は10人以上いるわけ
です。研究者は個別の学部へ属し、個別の
研究・教育をしておられますので、大学
内でもあまり交流はないわけ
です。私は農や林に関係する地域の皆
さん方のご支援もえて、この10数人の
グループを一つのグループとして組織
化し、何ができるかという議論から
始めようというふうには思ひます。従
って農や林に関心があり、或いはそれ
らを大事だと思ひ方とは、いろいろ
なお話をさせていただきたいと思ひ
ます。また和歌山にこういうこと
があるのは重要だというメッセージを
是非和歌山大学の先生方にも発して
いただければ励まされて進むのでは
ないかと思っております。

冒頭、和歌山大学に宇宙教育研究所とい
うのがなぜ設置されたのかについて、
不思議に思われる方もあ
るでしょうという話をしまし
た。和歌山県には美里天文台とか川
辺天文台などいろいろあり
ますが、実は若い天文学研究者が
集積している地域なので
す。ところが天文台をつくる時
には、各自治体も頑張っ
ていただいたのですが、美里町も
川辺町も合併してしま
い天文台の存在が非常に危
うくなったということをお聞
きしまして、かつて美里天文台
長であった、尾久土教授が私
のところへきて、若い研究
者がいるのだからこの研究
者をネットワーク化したら
東大よりも国立天文台の
研究

所よりもすごい研究組織ができるというふうに熱っぽく訴えました。それでこの若い研究者を和歌山大学の客員教授にしようということになり和歌山・和歌山大学に大きな天文学研究者の集団ができ、それが今日の宇宙教育研究所の源になっておるのです。

そういう意味で、農と林をテーマとする研究集団づくりの見通しは不明ではありますが、和歌山に貢献することのできる研究者、和歌山に貢献したいという研究者の志を引き出して、是非一つの組

織にしていきたいと思っておりますので、今後ともご支援を頂きたいと思えます。

「ヒトが人間となる社会」を構想するというのは、壮大な事業でございますが、是非、高等教育機関もその役割を担って、皆様方と進みたいと思っております。特に、和歌山のようにいろいろな困難を抱え、困難を経験しているものだからこそ、できることを是非手始めにやっていきたいと思えますのでどうぞよろしくお願ひします。

ご静聴どうもありがとうございました。

講師プロフィール



講師／和歌山大学 学長

山本 健 慈(やまもと けんじ)氏

- 〈生年月日〉 1948年 8月29日生
- 〈本 籍 地〉 滋賀県
- 〈最終学歴〉 1977.3 京都大学大学院教育学研究科博士課程単位修得退学
- 〈学 位〉 教育学修士(京都大学)
- 〈専 攻〉 教育学・社会教育・生涯学習論
- 〈経 歴〉 1977.4 和歌山大学教育学部助手
1978.4 和歌山大学教育学部講師
1981.4 和歌山大学教育学部助教授
1995.4 和歌山大学教育学部教授
1998.4 和歌山大学生涯学習教育研究センター教授
〃 和歌山大学生涯学習教育研究センター長(2008.3まで)
2004.4 和歌山大学評議員(2009.3まで)
2007.4 和歌山大学副学長(2009.3まで)
2007.10 和歌山大学サテライト部長(2009.3まで)
2008.4 和歌山大学教育学部教授
2009.5 和歌山大学副学長
2009.8 和歌山大学長